

〈1.短期留学に参加した理由〉

私はもともと留学に興味はありましたが、英語で自分の思いを的確に伝えたり相手の主張を理解するのが難しく、長期留学はハードルが高いなと感じていました。高校卒業から英語には全く触れていなかったのも、短い時間でも実際に英語圏で過ごし、常に英語が必要となる環境で学ぶことで、さらに英語に親しみをもちたいと考えました。今回参加したプログラムでは語学だけでなく、オーストラリアの多文化社会や教育、美術、歴史について短期間ながら学べると聞き、他国の文化に触れることに魅力を感じて参加を決めました。

〈2.印象に残っていること〉

特に印象に残っていることの1つ目は、日本語と英語のバイリンガル教育を行なっているコーフィールド小学校の視察です。インターナショナルスクールや海外の学校を見るのは初めてで、全てが新鮮でした。様々なバックグラウンドを持つ子どもたちが同じ教室で学んでいましたが、彼らは自分やクラスメイトを「〇〇人」といった色眼鏡を通して見ることなく接しているように見えました。人種や出生にとらわれず、その人自身を見ている子どもたちの姿にハッとさせられる場面がいくつもありました。また、教育に対する視点の新しさについても多くの学びを得ました。

ほとんどの日本教育では、知識を授業中に一斉にインプットし、テストなどでアウトプットする、といった形式をどの学校種でも用いています。私は小学校から高校まで一般的な日本の学校に通っていましたが、（教師によると思いますが）板書したりワークを解いたり授業がルーティン化・作業化している気がしました。コーフィールド小学校の授業の中には、一見するとただのゲームのように見えるものもありましたが、遊びを通して学びを得る仕組みになっており、楽しさが学びのハードルを下げる効果があると気づきました。「楽しい」という感情から学びや気づきを子どもたち自身が自然かつ主体的に得られるという点が新しく、どの教科でも取り入れやすいのです。しかし、日本でも積極的に取り入れるべきだと感じる反面で、教師が「何が目的か、こういった活動から何を学んで欲しいのか、できるようになって欲しいのか」を明確にした上で、教師同士の連携や児童生徒への開示・理解を綿密に練らないと、到達点が曖昧になる上に、児童生徒のモチベーションも下がってしまう可能性があるため、取り入れ方は精査するべきだとも同時に思いました。その学校の授業形式にとらわれすぎたり、無理に不慣れな遊びを授業の中に取り入れたりしてしまえば、児童生徒としても着地点がわからなくなる可能性があります。その点で、コーフィールド小学校では、どの授業でも校訓を踏まえた本時の目標を児童にし

っかり確認させていました。日本の小学校では、校訓や目標の意識をさせるところまでやっているところは少数派だと思います。（私は小学校を転校して2つの校風を見てきましたが、目標などは掲示するのみで、あまり児童生徒・授業自体に影響を与えているというわけではありませんでした。）コーフィールド小学校では目標をマグネットカードで視覚化し、目標の意味も理解させており、さらに各授業の目標も学校のスローガンに基づいたものでした。日本の教育にも「目標の明確化」と共有意識はさらに必要だと改めて実感しました。「遊びを取り入れた授業」は学びの楽しさを実感させ、ハードルを下げる1つの手段として考えていくべきだと感じました。

2つ目はメルボルン大学でのセミナーです。メルボルン大学でセミナーがあると聞き、楽しみではありましたが、教授や他の学生の言っていることが理解できるか、私自身も発言できるか不安でした。しかし実際は、グループでの人生ゲームや2択クエスチョンワークなど、講義というより、ゲームの結果を分析して社会の現状を学んだり、正解のない課題に対して互いに意見交換したりと、想像よりアクティブなセミナーでした。いろいろな国の学生がいて、公平、不公平や様々な資本による人生の生き方、運に対する考え方にも幅があり、視野が広がりました。今までは授業中発言するのに、「否定されたらどうしよう」とか「間違えたらどうしよう」と少し抵抗がありましたが、他の学生たちが気にせずどんどん発言したり、意見を目を見て聞いてくれたので、発言することのハードルが下がったと感じています。拙い英語でしたが、周りの方々のサポートもあり私も積極的に考えを発言できました。自分や他人の意見が人と異なりマイノリティなものであっても、貴重なものであるし、お互いの気づきにも繋がるので、積極的に発言していこうと思えた体験でした。

この他にも、メルボルン博物館、移民博物館、動物園、美術館でのワークショップなど、文化や歴史、芸術に触れられる機会がたくさんあり、スケジュール次第で自分の興味のある施設に足を運ぶこともできました。オーストラリアの先住民族や移民の歴史に触れ、多様性について学びを得られる機会が多く、自国や社会の課題に向き合う重要性を実感しました。



〈3.学んだこと〉

参加を通して学んだことのひとつは、「相手を理解する姿勢」を持つことの大切さです。博物館や大学でのセミナー、小学校視察はもちろん、日常生活の中からも学びを得たことでしたが、ただ何でもイエスと受け入れるというわけではなく、お互いの文化やバックグラウンド、考えを「そういうこともあるんだ」と認識し捉え、尊重し合うことが重要だと感じました。アイデンティティに関して、日本では「日本人であること」をアイデンティティの一部として強く意識している人は少ない印象ですが、移民博物館を訪れた際、移民の人々にとっては自分の出生、バックグラウンドがアイデンティティの一部でもあり、芸術における自己表現が「自分たちの文化の象徴」になっていることを知りました。多文化社会ならではの価値観の違いを実感したとともに、芸術の捉え方や自己表現の幅広さについてもさらに興味が湧きました。



〈4.今後活かしたいこと〉

このプログラムを経て、今後はより積極的に、人種や出生関係なくさまざまな人と関わっていききたいと強く感じました。そして、その際には自分自身の色眼鏡を外し、相手を偏見なく理解しようとする姿勢を大切にしたいです。そのためには日本語以外にも意思疎通できる語学力やコミュニケーション力も必要なので、語学の勉強やより多くの人と話す経験を積んでいきたいです。自由時間に聾学校併設の手話カフェにも伺いましたが、「伝える」「伝わる」の形は無限にあると私は考えているので（芸術的な面でも）、口に出す言語以外についても勉強してみたいです。

また、今後長期の交換留学や語学留学にもぜひ参加してみたいと思います。今回参加した学芸大のメンバーは学年も専攻もバラバラだったので、最初は話が合うか不安でした。しかし実際は話が合うかどうかはあまり関係なくて、私たちだけで意見交換をしても視点が違ったり、考えが深かったりと、それだけでも非常に刺激的でした。みんなお互いに自分の学んでいることをプログラムの内容に結びつけ、補い合えたのでとても良い経験でした。グループ留学の強みはここだと考えます。自分と違う分野の人と関わることで自分自身の視野も広げられるので、臆せず人と接していきたいです。